HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『自衛 - 独立ユダヤ週刊新聞』の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	中村, 寿
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第11063号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/53790
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Hisashi_Nakamura_abstract.pdf (「論文内容の要旨」)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（文学）　氏名　中村　寿

学位論文題名
『自衛 － 独立ユダヤ週刊新聞』の研究

本論文は、1907 年、オーストリア＝ハンガリー帝国ボヘミア王国の首都プラハに創刊された、ユダヤ人のシオニズム系新聞『自衛』（*Selbstwehr*）の分析をもとに、20 世紀初頭のプラハにおける若きシオニズム運動の動態を明らかにしたものである。

第１章第１節から２節までは、『自衛』と同じシオニズム系週刊新聞である『世界』（*Die Welt*）を参照しながら、『自衛』の思想的背景となった、テオドール・ヘルツルを中心とする初期シオニズム運動の言説と、そのナショナル・イデオロギーとしてのメシアニズム解釈を考察している。シオニズムを批判する西欧の同化ユダヤ人が、ユダヤ人の「宗教性」と「国民性」を両立不可能な対立概念とみなすのに対し、ヘルツルは、「新しい国民的ユダヤ運動」を提唱し、ユダヤ人の宗教的帰属と国民的帰属とを一致させようとした。神の摂理としてのメシアニズムにこうした現実政策を持ち込もうとする視座は、そのまま『自衛』に引き継がれていくことになるが、ユダヤ民族の文化的、国民的アイデンティティをめぐる議論は、シオニズム党派の読者層のみならず、当時、『自衛』に自作の原稿を投稿していたフランツ・カフカや「プラハ・サークル」と呼ばれる若いユダヤ系作家たちにも少なからぬ影響を及ぼしていた。第３節では、カフカと『自衛』の関係を取り上げ、両者に共有されている視点として、東欧ユダヤ人に対する同胞意識、その文化に対する積極的な評価があったことを指摘している。カフカの父親に代表される世代のドイツ系ユダヤ人の大多数は、東欧ユダヤ人を蔑み、彼らに対し、西欧文化への順応・同化を強く求めていた。同化ユダヤ人のまなざしに映る東欧ユダヤ人の姿は、カフカのテクストに登場する「虱」や、「甲虫」に変身したザムザに重ね合わされる。第４節では、啓蒙主義の伝統に依拠してドイツ市民社会への同化を説くヘルマン・コーエンの著作やユダヤ・リベラル系の雑誌に着目し、第一次世界大戦期における東欧ユダヤ人問題を論じて、リベラル系の立場と『自衛』から読み取られるシオニズムとの相違を鮮明化している。

第２章は、『自衛』創刊への社会的な背景とマルティン・ブーバーの文化的シオニズム論を分析している。第１、２節は、ドイツ人とチェコ人による民族対立下のボヘミア

におけるユダヤ人の中立的立場について論じ、第３節では、プラハにおけるシオニズム学生協会の沿革を詳細に取り上げている。本章においてシオニズム学生機関が記述の対象になる理由は、『自衛』が、プラハのシオニズム機関「ユダヤ民族協会－ツィオン」の機関紙であると同時に、シオニズム学生協会「バール・コクバ」、「バリッシア」の機関紙の役割をも兼ねていたからである。第 4 節では、このバール・コクバの主催する「祝祭の夕べ」に招待講演者としてプラハを訪問したブーバーの「ユダヤ・ルネサンス」論を考察し、ユダヤ文化の再興を唱えるブーバーを「文化的ナショナリスト」と位置づけている。彼の講演は、ドイツ系ユダヤ人学生に対し、東欧ユダヤ人のイディッシュ文化に倣った、西欧ユダヤ人による新たなユダヤ文化の創造の可能性を問うものであり、この考え方が、『自衛』の基本的な綱領として受け継がれていく。第 5、６節では、その具体的な例証として、『自衛』創刊号に掲載された論説文「旧諸民族の覚醒」と「少数民族の文学」について考察している。

第３章第１節では、プラハ大学におけるチェコ語部門の設置に際し、ドイツ系のシオニズム学生がユダヤ国民としての在籍登録の可能性を模索していたことを指摘している。その際、『自衛』は「ほんとうのユダヤ人」というユダヤの自己表象を用いるのであるが、このイメージは、シオニストだけではなく、パーヴェル・アイスナーのような、同化主義的と見なされることもある作家にも共有されていたことを確認している。第２節では、『自衛』の関連出版物『ユダヤのプラハ』（*Das jüdische Prag*）から、ドイツ系ユダヤ人の故郷喪失者の問題提起を読み取っている。彼らにとって、シオニズムは故郷の喪失に対する癒しの試みでもあった。「真正のユダヤ人」というシオニストの自己表象は、第３節の「腐った果実」において再度取り上げられる。伝統的なユダヤ教の同化主義を腐った果実と批判する投稿者ニールスのテクスト分析を通して、『自衛』が、たんに反ユダヤ主義に対する自衛の呼びかけであるだけでなく、その論調はむしろユダヤ教正統主義に対する若きユダヤ人の内的な批判に重点が置かれていたのだ、という申請者の主張が検証される。第４節では、オーストリア＝ハンガリー帝国内における諸国民と対等な権利を追求するという、『自衛』の「国民的利益政治」の内容を検討している。第５節では、ニールスという匿名投稿者が『自衛』の創刊者フランツ・シュタイナーであることを確認している。

第４章は、創刊号全体の詳細な分析にあてられている。第１節から２節までは、紙面構成の紹介とともに、特定のイデオロギーを排して「あらゆる若きユダヤのルネサンス運動」を推進するという『自衛』の基本綱領と、政治・経済・社会・文化等、ユダヤに関連するすべての記事を取り上げるという編集方針が確認される。第３節から６節までは、個々の論説記事の内容を解説、第７節は、文芸欄に掲載されたダフィート・ロートブルームの創作『わが母のメルヘン』（*Das Märchen meiner Mutter*）の解釈を試みている。この創作テクストは、故郷から追放されて離散した一族が、再び自らの矜恃を取り戻して立ち上がろうとするまでの顛末を語ったものであり、そこに申請者は、『自衛』

創刊の目的のアレゴリー的な意味を読み取っている。

第５章では、シュタイナーの「国民的利益政治」（第３章）の発展形態を問うている。シュタイナーがユダヤの「国民的利益政治」の内実として、チェコ人と対等な権利の要求を掲げていたのに対し、本章第１節で取り上げるカディッシュは、それをさらに推し進め、「若きユダヤ人による国民政治」の展望を打ち出した。第２節では、『自衛』創刊から約十年後の、1916 年春におけるカディッシュの記事を追跡している。彼は、第一次世界大戦のドイツ、オーストリア＝ハンガリー帝国による東方侵攻に、パレスチナにおけるユダヤの国民的自治の可能性を模索していた。しかし、オーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊にともない、「若きユダヤ人の国民性政治」の展望は、見果てぬ夢に終わる。

結語では、本論文での研究成果を総括するとともに、オーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊後に誕生したチェコスロヴァキア共和国におけるドイツ系ユダヤ人のためのシオニズム系新聞という、新たな『自衛』の活動史記述への展望を示している。